

# 妖精のクラッカー

ポン2

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

マギとフェアリーテイルのクロスした作品です。本作品の主人公はギルダーツであります。ヒロインはヤムライハを考えてる予定です。更新はかなりおそいのでよろしく願います。

# 目次

## 第一章 シンドリア王国

マジ×ギルダーツ	—	1
マジ×ギルダーツ	—	11
マジ×ギルダーツ	—	21
マジ×ギルダーツ	—	26



# 第一章 シンドリア王国

## マギ×ギルダーツ

### 主人公紹介

名前：ギルダーツ・クライヴ

性別：男

職業：魔導士

年齢：45歳

魔法：クラツシュ

触れたものを全て粉々に砕く。これにより無意識に周りの建物を壊してしまう癖がある。

技：破邪顕正・一天（はじやけんせい・いつてん）

妖精の法律（フェアリーロウ）

術者が敵と認識したもの全てをうつ超魔法

ギルダーツがマギの世界にいたらという好奇心だけで作っちゃいました。ちなみにギルダーツはフェアリーロウを使えるという設定です。見たいかたはどうぞ。

~~~~~

俺は今とても混乱している。

何故かって？

決まっている。

いったいここはどこなんだ？

マギ×ギルダーツ

今この島ではあちこちで争いが起きている。この島には国があり、王がいて、国民がいる。この島の名はシンドリア王国。今この国は組織による攻撃を受けていた。それを防ぐためシンドバットは彼の部下である八人将に各場所で戦うように命じてあり、あちこちで戦闘が起きているのであった。

そんな中ある森の中では戦闘がおきているのにもかかわらず、警戒心なしで歩いている男がいた。その男の名はギルダーツ・クライヴ。魔導士ギルドフェアリーテイルのS級魔導士であり、フェアリーテイル最強候補の一人である。

「いったいここはどこなんだ？まわりはうるさいわ。天狼島じゃなさそうだし。」

ギルダーツはさつきまでのことを思い返してみる。

「(たしかガキどものS級昇格試験で天狼島にいつて闇ギルドグリモアハートがでてきてアクノロギアがが出てきて島ごと吹っ飛ばされたはずじゃ・・・まあ考えたってしかたねーか。お？女の匂いがある。まずはそこにいくか。)」

ギルダーツは変態であった。過去何人もの女を抱いたギルダーツの鼻はもはや滅竜魔導師のナツと同じくらい嗅覚をもっていた。ギルダーツはまわりの障害物を無意識にバラバラにしながら歩いていくのだった。

そのころギルダーツの進む方向の海の上では八人将のヤムライハとアポロニウスが戦っていた。

「シヤラール・バラク」

水流がうねりながら鋭い矢のようにアポロニウスめがけていく。

「ふおーふおふおふおーそんな攻撃きかんわ」

だが闇の金属器使いであるアポロニウスはそれを黒い球体を当てることで防ぎ持久戦にもちこんでいた。そして何回かこのやりとりが続き、ついにヤムライハのマゴイがつきてしまった。



「マゴイが つきた ようだの」

そういうと 闇の 金属器で ヤムライハの 装飾を 壊して いく。

「いやー！」

「ふおーふおふおふおー！ いいざまじゃ。 所詮魔導士など 我ら 金属器使いの 敵ではないぞ。」

「ゲスジジイ。 ごたくが多いわよ。 ああー、 弱い犬ほどよく吠えるってやつね。」

「おっ・・・おのれえー、 わしの 全身魔装を みるがいい」

そういうと アポロニウスは 闇の 金属器と 合体し 昆虫みたいな 姿になった。

「極大魔法 フラッシュ・アルフラーフ」

巨大な光線が、ヤムライハめがけて発射された。それがヤムライハに当たろうとしたときにヤムライハは驚いた。なぜなら

「たく、そんなあぶねー魔法を女にむけて放つもんじゃねーつての。」

アポロニウスが放った極大魔法はギルダーツのクラッシュによって粉々になったのだった。

「え？」

「なにい？わしの極大魔法がバラバラに」

ヤムライハは後ろを向いた。そこには全く知らない人が陸地に立っており、腕をこっちに向けたまましゃべっていたのだから。これがヤムライハとギルダーツの運命の出逢いとも知らずに。

「おのれえーおのれえーきさまー!!!」

アポロニウスはマゴイがしてきたのか全身魔装が解け、ギルダーツに突進していく。その途中でヤムライハをスルーして。

「え？ちよつわたしスルー!？」

ギルダーツは自分に向かってくるアポロニウスを目に入れて少し魔力の質をあげる。

「うるさいぞじいさん。少し黙っててもらおうか。」

そしてアポロニウスの突進がギルダーツに決まろうとしたときにギルダーツの攻撃が決まった。

「破邪顕正・一天」

ギルダーツの拳がアポロニウスの下あごに決まり、アポロニウスは星となったのだ。た。

こうしてこの場所での戦闘は終わったのだった。ヤムライハは戦闘が終わったので陸地に降りてギルダーツのところへ向かう。

「大丈夫か？おじょうさん。」

ギルダーツは自分の上着をヤムライハにかけてあげる。そうすると当然ギルダーツは上裸になるのだがヤムライハは一つ気になるのを見つけた。

「ありがとう。助かったわ。おかげであんなジジイ殺らなくてすんだわけだし。それよりも、その左胸にある紋章なんだけど……」

ギルダーツはああと納得した顔になった。

「こいつは魔導士ギルドフェアリーテイルの紋章だ。自己紹介といくか。俺はギルダーツ・クライヴ。フェアリーテイルの魔導士だ。」

「フェアリーテイル？聞いたことないわね。私はシンドリア王国シンドバット王の部

下、八人将の一人のヤムライハよ。よろしく。ギルダーツさん。」

「ヤムライハか、いい名だ。それにしてもフェアリーテイルを知らないか。となるとアキノロギアのブレスの衝撃でかなり遠い地方に飛ばされたか、空間を飛び越えて違う世界にきたか、だな。」

「ん?」

ヤムライハはギルダーツが後半何を言ったのかが聞こえなかった。

「妖精に尻尾はあるのかないのか? 永遠の謎、故に永遠の冒険」

「それは・・・」

「これがうちのギルド、フェアリーテイルの名の意味だ。」

「随分素敵な意味をもっていたのね。」

ヤムライハは笑顔で答えたのだった。

## マギ×ギルダーツ2

シンドリア王国対組織の勝敗はシンドリア王国の勝利で終わった。シンドリア王国に紛れ込んだギルダーツはヤムライハといっしょに王であるシンドバットのところへ向かうところであった。

「それにしてもギルダーツさんは魔導士だったんですね」

「ギルダーツでいい。」

「そう、ならギルダーツはさつき何の魔法を使ったんですか？」

「ああー、あれかあれはクラツシュっていつてなあらゆるものを破壊できる超上級魔法だ。」

ギルダーツは頭をボリボリかきながら答える。そして右腕を横にむけるとそこに

あつた木がバラバラになった。

「まあこいつのせいで無意識に発動しちまうのが難点なんだがな」

ヤムライハはギルダーツを見る。上から下まで。あきらかに私よりは年上で魔導士でひげが生えててかっこいいし強いし。あれ、これ私の好みのタイプなんじゃ・・・ヤムライハの視線を感じ取ったギルダーツは不思議がる。

「どうした？そんなじろじろみて。俺の身体になんかあんのか？」

「え？っいやっあの、その」

ヤムライハはビックリしてあわてだす。そしてギルダーツは自分の身体を見る。そして納得がいった。

「ああなるほど、そりや聞きたくても聞けねえな。俺の左腕と左足。まあいいさ、これもなんかの運命かもしれないから、武勇伝聞かせてやるよ。」



ギルダーツはおもいつきり勘違いしてるのだがあえてつつこまない。ヤムライハは運命という言葉に敏感に反応したが何故かギルダーツのことをもっと知りたくなって今か今かとまっている。

「(あれ、私どうしたんだろう。もしかして私、ギルダーツに恋!?)」

そんなヤムライハの心中を知らないギルダーツは語り出す。

「こいつはつい最近の出来事なんだがな、俺はギルドの仕事で1000年クエストに挑んでたんだ。」

「1000年クエスト?」

「ああ、1000年クエストつーのは1000年間誰もその依頼を成功させたものがないという意味があつてな。まあそれに挑戦してたんだ。だがその途中でドラゴンにあつてな、戦闘になったんだが手も足も出ずにこのざまってわけさ。まっ、そのせいで

クエスト失敗ってわけさ。」

ヤムライハはギルダーツの左腕と左足を見て悲しそうな顔になる。それよりも気になる単語が出てきた。

「ドラゴン!?!いるんですか?ドラゴンが」

「ああ、アクノロギアってドラゴンだ。多分今ごろ世界中がその名を知ってる!」

「アクノロギア・・・聞いたことないわね。」

そしてギルダーツは思ってたことが確信となった。

「やはりそうか。思ってた通りだ。」

「ん?」

「最初に言っておく。俺はこの世界の人間じゃない。」

「え？この世界の人間じゃないって・・・アキノロギア・・・フィオーレ王国、魔導士ギルド、フェアリーテイル・・・まさかそんなことって」

「どうやらヤムライハも気づいたようだ。その頭脳の高さにギルダーツは誉める。」

「ああ、それはもう事実だろう。俺はっていうより俺たちのギルドはS級昇格試験を天狼島って場所ですべてその途中に闇ギルドが襲ってきた。追いついたらアキノロギアが出てきてプレスで島ごとふっとんだはずで気づいたらこの世界にいたんだ。」

「そんなことが」

「そんなこんなで話したらどうやら宮殿についたようだ。」

「ここがシンドバット王にあってもらうわよ。」

「ああ」

そしてしばらくして

「入っていいわ」

そしてギルダーツは王のいる部屋、シンドバット王がいる部屋に入った。

ギルダーツはあたりを見渡す。ギルダーツにとっては王宮の部屋がどれほどいいかなんてのは正直わからないがまあ広いなってぐらいだった。

「ようこそ、わがシンドリア王国へ。」

ギルダーツを待っていたのは20代ぐらいに見える身長高めのイケメンだった。

「俺の名はシンドバット。このシンドリア王国の王をつとめている。よろしくたのむよ。」

「俺はギルダーツ。魔導士ギルドフェアリーテイルの魔導士だ。よろしく。」

おたがいが握手する。それからギルダーツとシンドバットは酒を飲みながらいろいろ話していた。ヤムライハはシンドバットとギルダーツに酒をいれてあげている。ヤムライハがわざわざする必要はないのだがギルダーツのそばにいたいと思ってやっているのだ。

「それにしてもギルダーツも王も今日の夜は謝肉祭（マハラガン）なのに大丈夫なんですか？」

「なあに、たしなむていどでよったりはしない。」

「ギルダーツは酒強いんだな。」

「娘に比べたら俺は弱い。」

とまあこんな感じで話が進んでたんだがヤムライハは途中からおかしくなっていた。

「(むすめ?ええ?じゃあギルダーツは・・・)ギ、ギルダーツ。」

ヤムライハの震える声に反応したギルダーツはヤムライハを見る。

「どうした?」

「ギルダーツって娘がいたんですか?」

ヤムライハは震える声でギルダーツに聞いた。シンドバットはヤムライハの今の状態を理解した。

「ああ、そういう話してなかったな。娘はいる。名前はカナで俺と同じギルドに所属している。それよりも震えてるが大丈夫か?部屋まで送ろうか?」

ギルダーツのこの言葉によってヤムライハは涙を流して杖にのって部屋に行ってしまった。シンドバットはやれやれといった感じで感じてギルダーツはなんなのかまだ気づい

てない様子。

「ヤムライハはいつたいどうしたんだ？」

「はあー、気づいてないのか。まあ一言だけ教えとくとあの状態のヤムライハはおとめってことだ。」

「なっ……なに……！！！！俺はいつ手だしたんだ？そんな記憶はないぞ。いったいいつからだ？くそつこの俺が女性の気持ちに気付かないなんて。シンドバット、部屋まで案内たのむ。」

さすがのギルダーツでも気づけたようだ。シンドバットは王を使うなよとかなんとかいつてたがヤムライハの部屋まで案内する。

「ここがヤムライハの部屋だ。多分いると思うが、まあ頑張るんだな。」

そういうとシンドバットは手を振りながら歩いてどつかへいく。残されたギルダ―

ツは扉をノックしてドアをあけて中に入る。そこにはベッドで泣いているヤムライハ  
がいたのだった。

つづく。



## マギ×ギルダーツ3

ヤムライハの部屋に訪れたギルダーツはヤムライハの近くまでいく。

「その、なんていうかすまねえ。ヤムライハの気持ちに気づいてやれなかった。俺はこの世界にきて帰る手段を考えていた。そのせいか、恋愛なんて柄じゃなかったし、娘もいるからな。だが、娘はいても妻はいない。妻は俺のもとから離れて風の便りでいつちまってるのを聞いている。」

ヤムライハは目に涙を浮かべてギルダーツの話をきいている。

「だが、今は違う。これからはヤムライハをちゃんと見る。一人の女として。俺にお前を愛する資格をくれねーか。ヤムライハ」

「・・・そういうの何て言うか知っていつてるの？浮気よ。浮気。私はギルダーツの浮気

相手にはならないわ。ギルダーツなんて本当最低!!ギルダーツのことなんて・・?!?!?」

ヤムライハがギルダーツに怒鳴っていたときギルダーツはヤムライハの唇を奪っていた。それに対してヤムライハは涙を流しながら言う。

「なんで。なんでなのよ。なんでそこまでして・・・」

「俺は確かに最低だ。今まで何人もの女と付き合ってきた。それはもう変えようのない事実だ。そして今度はヤムライハ。お前だ。俺はお前を愛する資格もなにもないのかもしれない。だが、これだけは言わせてくれ。俺はこれからはヤムライハ自身を見ることにする。一人の女として。もし、俺に愛する資格をくれるのなら俺はその時にもう一度ヤムライハと向き合おうと思う。一人の男としてな。とまあかたくなっちゃったが俺はここらで失礼させてもらうわ。じゃあな。」

そうしてギルダーツは部屋から出ようとした。だがそれは一人の声によつてとめられた。

「まっつて！」

ギルダーツは声がしたほうへ振り向く。そこには自分を呼び止めるヤムライハがいた。

「その、なんていうか、わたし、今まで男性とつきあったことないの。それでもいいの？」

ヤムライハは涙声で言う。

「そんなもん、俺がなんとかしてやるさ。」

「それじゃあ、その、これからよろしくお願いします。」

「ああこちらこそ。」

こうしてギルダーツとヤムライハは正式に付き合うこととなった。次の日にはギルダーツとヤムライハの関係はばれていて国中に広まっていたのだった。

そして無事謝肉祭も終わり、アラジン達も旅だったところから話はまた始まる。

「いっちゃった」

ヤムライハはギルダーツに寄り添いながら海へ旅だったアラジン達の船を見つめる。

「ああ。ガキどもの成長を見るのはやっぱいいもんだな。」

ギルダーツはフェアリーテイルのことを思う。そんな様子を見てたヤムライハは思うところがあるのかギルダーツ聞く。

「やっぱりギルドに帰りたい？」

「ああ、だが今はまだいいさ。」

そうしてギルダーツとヤムライハは王宮に戻ろうとするが

「ちよつとまつてくれ。ギルダーツ」

ギルダーツとヤムライハは振り向くとシンドバットが真剣な顔で呼びかけていた。

「ヤムライハも聞いていってくれ。」

シンドバットはヤムライハにもきいてほしいと言う。二人はなんのことかは分からなかった。だがシンドバットから告げられたことを聞いて二人は驚くことになるのだった。

## マギ×ギルダーツ4

真剣な顔で呼びかけていたシンドバットはヤムライハにもきいてほしいと言う。そして二人が驚くべきことを言うのだった。

「ギルダーツとヤムライハに任務を頼みたい。」

ギルダーツとヤムライハはシンドバットから任務内容を聞く。その内容はこうだ。

「バルバットに突如表れた魔導士どもが暴れてるらしい。王宮の手に負えないようデシンドリアに助力を求めてきた。そこで魔導士なら魔導士ということでお前らを送ることをきめたんだ。」

「なるほどな。それで、その魔導士の情報はあるのか？」

「ああ、一人一人は分からないがリーダーならある。リーダーの名はブルーノートとい

うらしい。」

その言葉をシンドバットが言った瞬間、シンドバットとヤムライハは突然息苦しくなる。なぜならギルダーツからあふれる魔力が怒っているからだ。

「そいつの名前はブルーノートであってるんだな？」

「ああ。」

「わかった。」

ギルダーツは無言のまま王宮にもどっていく。取り残されたシンドバットとヤムライハはギルダーツがいきなり変わったことに驚いた。ヤムライハはギルダーツのことを心配な眼差しで見つめていた。

王宮にある自分の自室に戻って荷物をまとめているギルダーツのところにヤムライハがやって来た。ヤムライハはもう荷物をまとめており、いつでも出発できるみたい

だ。

「ギルダーツ。ブルーノートつてもしかして・・・」

「ああ。ヤムライハの思ってることであつてるさ。あいつはうちのギルドに手を出してきた闇ギルドグリモアハートの魔導士であり、俺の娘の命を奪おうとした張本人だ。」

「そうだったんだ」

「さて、バルバットに向けていくぞ。」

こうしてギルダーツとヤムライハはバルバットに向けて旅に出るのだった。そしてここから時間は流れて流れて今はバルバットに向かう船の中である。今この二人は突如出てきた海王生物と戦っている。

「クラッシュ」



「シャラール・バラク」

こういう風にどんどん出てくるモンスター達を倒しているのだった。

「なんで、こんなに出てくんだよ。」

「確かに、ちよつとしつこい！」

ギルダーツ達がモンスターを倒す数が50体ぐらいになってきた。ギルダーツとヤムライハはさすがに不信に思い、何が原因かを考える。

「このあたりの海域はいつもこうなのか？」

「いえ、たまに出てきたりはするけどこれは異常よ。このあたりで何か起きているはず。たとえば……海の中とか」

「海の中か。」

いくらギルダーツといえども海の中に及ぼす魔法は持ち合わせていなくどうしようか考えていた。するとギルダーツの乗る船の近くに樽が漂っていた。それに気づいたギルダーツは船員に回収してもらい、中をあけた。するとその中には変な機械が入っていた。

「なんだ？こりゃ」

「魔法道具・・・ではなさそうね。」

見た目が車のエンジンのような機械がそこにあつた。すると突然その機械が喋りだした。

「タ・・タノミマス。」

「こいつ、しゃべったぞ。」

「生きているの!？」

ギルダーツとヤムライハは機械が喋りだしたことに驚いた。

「ワタシヲ・・・コワシテ・・・クダサイ」

機械は自分を壊してほしいと言う。

「なんだ?いきなり」

「何か理由があるのね」

「ハヤク・・・コワシ・・・テ」

すると突然機械からどす黒い波があたりをおおいつくした。

「なっ何が起きてやがる。」

「闇?..」

闇がおさまってくると機械だったものの姿が変わっていた。その姿はまるで悪魔の用でその悪魔が吠えるだけでまわりの海王生物達は狂ったように暴れだす。

「こいつは!?!ゼレフ書の悪魔・・・だと!」

「ゼレフ書の悪魔?てことはギルダーツの・・・」

「ああ間違いない。とするとゼレフもこちら側にいる可能性もあるな。まあまずはこいつをどうにかするぞ。」

「りよーかい。」

こうしてゼレフ書の悪魔とギルダーツ達の戦いが始まるのだった。